

それでも, 大学が必要だ : 爆発と危機の中で

吉見, 俊哉 / Yoshimi, Shunya

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / 社会志林

(巻 / Volume)

56

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

271

(終了ページ / End Page)

279

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021085>

それでも、大学が必要だ

——爆発と危機の中で——

吉 見 俊 哉

I

考えてみると、私は大学に勤め始めてからすでに約四半世紀になる。それ以前、すでに10年以上を学生として過ごしていたわけだから、約35年、人生の約七割の時間を大学キャンパスで過ごしてきたともいえる。それにもかかわらず、大学とは何かについて真剣に考えざるを得ないと思い始めたのは比較的最近のことである。若いころは、大学なんてどうでもよかった。学生として所属してはいても、大学が何かということよりも、大学の外の世界に何が起きているかのほうがずっと大切だった。大学は、そのような現実から隔離された空虚な場所と感じられていた。教室を飛び出して都市にたむろするのを選ぼうとする時代の気分がまだ残っていたのかもしれない。

その後、大学教師という立場になってからも、しばらくは大学が揺らぎ始めているという実感はなかった。しかし、やがて90年代も半ばを過ぎたあたりから、大学は激動の時代に入りつつあると感じ始めた。大学設置基準の大綱化と教養部解体、大学院重点化による大学院生数の激増、留学生の急速な増大、オーバードクターの累積と若手研究者のポストの不安定化等々、大学教師の日常は、明らかに80年代までとは異なるものになっていた。やがて国立大学は法人化され、その組織形態は劇的に変化し始める。そうしたなかで、大学は所与の前提というよりも、大学紛争の時代とは別の意味で、それ自体が問われ、再定義されるべき存在に変化していった。

じっくり机に向かって本を読み続けることなど不可能で、日々業務と教育に追われなくてはならないこうした時代に大学教師でいることは幸せなのか、不幸せなのか——。私たちよりも20年か、30年ほど上の世代は、こうした大学の激動を直接経験することはあまりなかったであろう。彼らの時代に大学は、いまだ権威の象徴であり、確固として変わらざるものであった。だからこそ、そのような確固たる権威主義を打倒すべく、1960年代から70年代にかけて多くの大学で学生たちの叛乱が広がっていったのである。この世代にとって、大学の知的権威は、まずもって打倒すべき敵であり、それを擁護しようなどというのは、反動的な保守主義者以外の何者でもなかった。

だが、90年代以降の大学激動のなかで、私たちは大学が、もはやそのような確固たる権威主義の牙城では到底ありえなくなってしまったことに気づき始める。良く言えば、大学は90年代以降、相当程度に民主化された。悪く言えば、大学も大学院も急速な大衆化のなかでその知的権威を大いに失墜させたのである。とりわけ大学院の権威失墜は甚だしく、かつては大学卒業者の中でもごく一部の知的エリート、というよりも変わり者が「入院」する場所とされていた大学院は、いまや

広く社会人にも開かれた「人材養成機関」と受けとめられるようになっていった。

この変化は、1980年代末以降の大学数、学生数の増加に象徴的に示されている。70年代初頭まで、日本の大学生数は毎年5～10万人の規模で増加し続けてきたが、1978年の186万人を頂点に減少に転じ始める。しかし、団塊の世代ジュニアが18歳に達する80年代後半には再び増加に転じ、90年代、この世代が大学を去った後も増加は続く。1995年には全学生数が250万人を突破し、2003年には280万人に達している。全体として、18歳人口が減少しているのに学生数だけが増加し続けるのは奇妙だが、その要因は、主に進学率のさらなる上昇である。80年代まではほぼ25%前後だった大学進学率は、90年代に入って増加を続け、95年に40%、2000年には47%、2005年にはついに50%を突破する。これに、大学院生の激増、留学生の増加などの要因が加わり、90年代以降、日本の大学在籍者数は増え続けていった。

しかもこうした学生数の増加は、大学数そのものの増加とも相関していた。敗戦時まではわずか48校にすぎなかった日本の大学数は、1960年に300校、75年に400校を超える。ここまでは、18歳人口そのものが増加し続けていたわけだから理解できなくはない。ところが大学数は、90年に507校、95年に565校、2000年に649校、2005年に726校と、18歳人口の減少にかかわらずその後も増え続けたのである。90年代以降の大学進学率の上昇は、多少なりともこうして増え続けた大学側からの新たな需要の掘り起こしの結果ではなかったか。ちょうどこの頃から、広告紙面をつかった大学の広報活動が盛んになり、各大学がさまざまなイメージ戦略に熱心に取り組むようになっていった。これは、もともと大学に入りたい膨大な若者たちの需要に大学側が応える構造から、学力や将来の志望はともあれ大学に進学はしておくという者を大学が自己努力によって創出していく構造への転換である。つまり、商品のマーケティングと同じ論理が大学進学者市場の掘り起こしにおいても広がっていったことを意味している。

90年代以降の大学の大量化はしかし、日本だけで起きていたのではない。ここ数十年で世界の潮流を考えたとき、大学は大爆発を続けているのである。というのも、世界の大学や学生数は、20世紀初頭まではかなり限られたものだったが、第二次大戦後になると急速に増大し始め、さらにこの30年間で爆発的に増大してきた。そして、この90年代以降の変化を支えてきたのは、とりわけ東アジア諸国の大学生数の激増であった。その結果、1970年の時点では、世界の大学生の最大多数は北米及び西ヨーロッパの大学生で全学生数の48%を占めていたのが、2007年までに23%と減り続け、反対に東アジア及び太平洋諸国の大学生数は、70年の14%から07年には31%と最大多数にのし上がっている。この間、日本の大学生数は漸増であるから、この激増の主要部分は中国や韓国などの国々の高学歴化に支えられたものであろう。

このような流れの中で、修士号、博士号などの学位取得者の数も爆発的に増え、国境を越えた大学間の結びつきは、留学生の増大や論文の相互の参照、共同研究の増加によっても広がっている。だいたい今日、どれほど多くの大学教授や留学生が世界を旅し続けていることだろう。世界のどこの主要都市の空港でも、入国手続きを経た出口には、お目当ての「プロフェッサー」を国際会議場に連れていくために手配された案内人が何人も立っている。大量の大学教授や留学生は、一人ひと

りはそれほどリッチではないとしても、すでにその数において世界の航空会社の得意客となっている。今日の世界で、大学という制度の支配力は縮小するどころか圧倒的なものになっており、グローバルな知識生産体制の最も支配的な部分をなしているのである。したがって我々は、大学の絶滅を心配する前に、まず今日、グローバルな知識体制として「爆発」しつつある「大学」が、その実質においていかに変質し、困難に直面しているのかを問わなければならない。

II

今日の大学を、誕生以来の大学の歴史の中に位置づけてみたら何が見えてくるか。一般に、大学が制度として誕生したのは12世紀から13世紀にかけての中世ヨーロッパのことであった。世界初の大学とされるボローニャ大学に神聖ローマ帝国皇帝の特許状が下されたのが1158年、パリ大学が教皇の勅書によって設立されるのが1231年のことである。この二つの原型的な大学に続き、13世紀には、英国でオックスフォード大学、ケンブリッジ大学の2大学が設立され、14世紀から15世紀にかけて、プラハ大学、ウィーン大学、クラカウ大学、ハイデルベルク大学、ライプチヒ大学などの中央ヨーロッパの大学が続々と誕生していった。中世的な秩序のなかで、大学、すなわちその根幹をなした教師及び学生の協同組合は、教皇権力と皇帝権力の対立を巧みに利用し、またこれら普遍的権力と都市を支配する地元有力者とのバランスを利用していった。

重要なのは、このような中世における大学の誕生に、同時代の都市を拠点とした広域的な人の行き来や物流の活発化が先行していたことである。急速に拡大する貿易と分業体制のなかで、都市は新しい経済のハブとなり、新種の商人から放浪の托鉢修道士まで、多種多様な移動民を抱え込み始めていた。生まれ故郷から離れ、一生を移動しながら過ごす彼らは、ヨーロッパ各地で勃興しつつあった都市に集い、そこで知識を交換し、新たな協同組合を形成していった。メディアといっても写本や手紙くらいだった時代、都市から都市へと移動する人々は、新しい知識を伝え、集積する最大のメディアであった。

当時、「遍歴者、流浪者、旅人の中には、学者や朗読者の小さなグループもあって、そのまわりにはいつも教を請う者たちが集まり、その影響圏に知識欲の旺盛な者たちがどっと押し寄せていた」（ハンス＝ヴェルナー・プラール）という。大学は、このような中世のノマド（遊牧民）たちが結びつくことで形成される協同組合の一種として出発したのであり、その組織原理の根底に移動性、越境性を内包している。彼らは移動する能力によってローカルな都市の権力やより普遍的な皇帝や教皇の権力を相対化する自由を手にしていたのであり、この移動性と一体になった「都市の自由」こそが、後年に理念化される「大学の自由」の現実的、歴史的な基盤である。

しかし、これらの中世の大学は、今日の大学のルーツではあり得ても、その直接の出発点ではない。それどころか、中世が終わるころには大学は次第に重要性を失い、一八世紀末に至るまで、知の発展や深化にとっては周縁的な存在にとどまり続ける。実際、一六世紀には、グーテンベルクによる印刷術の発明により、それまでの手書きの文化が活版印刷の文化に転換するという、人類の知

識史上決定的な革命が起きていた。この印刷革命は、宗教改革や近代科学の誕生の必須の前提となっていく。そして、このメディア史上の革命によって、ラテン語の知識世界は徐々にドイツ語、フランス語といった国民語を基盤にする世界に変容し、やがて印刷された本を基盤に近代知の巨人たちが登場してくる。

ところが大学は、このような近代の知識世界の形成において、ほとんど重要な役割を果たしていない。だいたいルネッサンスの人文主義者、ガリレオからニュートンに至る近代科学の創造者たち、さらにはデカルト、パスカル、ロック、スピノザ、ライプニッツといった17世紀の知の巨人たちの中に、一人でも大学教授がいたであろうか。16世紀から18世紀まで、つまり近代という時代が立ちあがってくる最も重要な時期に、大学はまったく重要ではないのである。

むしろこの時代の大学は、中世の都市間移動のネットワークを背景にした自由な知的創造性を失っていた。すでに16世紀、宗教改革の嵐のなかで、大学は対立を越えた公共的な場を形成するどころか、新旧両派に分裂し、お互いに相手の言い分を拒絶する体制を作り上げた。他方でこの時代、領邦の君主たちは、しばしば功名心から新しい大学を設立したり、既存のギムナジウムを大学に昇格させたりしたが、多くは大学の名前を冠したものの実質が伴わず、やがて君主権力の衰えとともに消えていくことになった。中世以来の大学の性格も変化していき、英国の二つの名門大学は、貴族的な規範を選ばれた若者たちに伝授する訓育機関の性格を強めていったし、そのような機能を持ち得なかったフランスの大学は没落への道を歩んでいった。

たしかに18世になると、近代知は大いに発展を遂げ、新たな知識生産と継承のシステムが必要とされていた。しかし、ここで主役を演じたのは大学ではない。むしろ絶対君主制下で軍事や医学、工学、法学などの専門知を集積し、伝達する機関として発達していったのは専門学校やアカデミーである。今日のように、専門学校を大学の下に置いてしまう我々の偏見は18世紀のものではない。むしろ18世紀には、医学にせよ、法学にせよ、トップレベルの専門学校は大学よりもずっと質が高くと考えられていた。たとえばベルリンの医師養成所は、いかなる大学の医学部よりも優れているとされ、またこの頃にはまだ大学に工学部はなかったから、工学的な知を発達させるのは、もっぱら鉱山アカデミーや建築アカデミーの役割だった。そしてこの時代の大学はといえば、次第に多くの貴族子弟を引き入れて、様々な宮廷の称号や礼儀作法、儀式、生活態度が取り入れられ、その権威主義のなかで学問的な創造性は窒息させられてしまっていた。

したがって、中世都市を基盤にダイナミックな自由を抱え込んだ公共的な知の空間として誕生した大学は、近代が形成されてくる歴史のなかで一度は死んだのである。そして19世紀、ナショナリズムと帝国主義の高揚を背景に、大学は新たな誕生のときを迎える。潮木守一ら教育史家たちが説得的に論じてきたように、この大学の「第二の誕生」は、19世紀初頭のドイツで、研究と教育の一致という「フンボルト理念」に沿うようになされていった。そしてこのドイツ発の研究型大学の概念が、20世紀を通じて米国を中心に世界に広がり、専門学校やアカデミーなどの知識制度を呑みこんで史上最大の研究教育システムにまで成長していくのだ。

フンボルト理念の具現として語られるゼミナールや自由な学問の空間はしかし、同時代の国民国

家、そして帝国主義の相互補完的な関係にあった。19世紀以降、ドイツで発達した研究型大学のモデルが現代の高等教育研究の普遍的な規範となり得たのは、この時代、新たに国民国家を創出し、さらにはそれを帝国へと成長させていく上で、大学という総合知の体制が中核的な重要性を帯びるようになったからにはかならない。とりわけ19世紀末以降、この研究型大学概念と国民国家＝帝国との表裏の関係を、おそらく他のどの国よりも顕著に示してきたのは日本、とりわけその帝国大学の歴史であった。

III

ここ数十年、世界の大学数と学生数は激増し、かつてなら「大学」には含まれなかった教育と研究の多様な制度を一元的に統合してきた。大学院重点化や留学生の増大、発展途上国の高学歴化はこうした傾向を加速している。しかも、日本のような人口が漸減しつつある社会でも大学数は増えており、この大学の過剰は、マーケティングで消費者の欲望が開発されるのと同様の論理で大学生市場を掘り起こしている。大学は今日、グローバルに知を生産する社会の全活動と重なるほどに肥大化し、内実を空洞化させている。

だが、歴史的な観点からいうならば、大学の概念が空洞化していったのは現代が最初ではない。大学はこれまで、少なくとも二度の誕生と一度の死を経てきている。12世紀から15世紀までに高揚期の後、近代初頭にダイナミズムを失い、知識生産の中心的な場所ではなくなった。この時期、印刷術は大学に勝利するのである。近代知を生み、発展させた決定的な基盤は活字のコミュニケーションであり、軍事、法学、医学、工学などの分野では、専門学校やアカデミーの専門教育である。ところが19世紀以降、大学は国民国家の、そして帝国の知的資源の主要な供給源に位置づけられ、人材育成と研究開発の両面で国家の支援を受けながら支配的な地位を確立していった。中世の大学が、地元有力者と教皇や皇帝権力の微妙なバランスを巧みに利用して自らの地歩を築いたのに対し、近代の大学の発展に国家からの強力な支援は不可欠であった。

今日、グローバルな学歴爆発と概念の空洞化のなかで、過去2世紀にわたる大学概念は危機に瀕している。これにはいくつかの理由があり、第一には、あまりにも数が膨れ上がってしまった大学群を、国がもはや支えきれなくなったことがある。戦前まで私立大学を入れても50校程度だった日本の大学は、戦後激増する。その多数を占めた私立大学に国が十分な責任を果たしてきたかは疑問だが、それでも80年代まで、国立大学は国の公共的な財源に支えられていた。しかし、90年代以降の「改革」後、国は750の大学を支える包括的な政策展開を放棄したように見える。

しかも今日、日本では、大学に入ることをマーケティングし、販売し、消費させていく強力な体制が出来上がっている。ここでは大学は、受験産業が知的資源を投資して開発したブランド商品市場である。とりわけこの国では、高等教育のマスの部分が私立大学によって担われ、公共的なセクターとしての制度構築がきわめて不十分にしかなされてこなかったのも、その裏面としてこのような形で大学ブランドの商品化が高度に発達してくることになった。今日、少子化のなかで多く

の日本の大学は、文字通り学歴ブランドを販売する情報サービス産業として生き残りをかけている。

こうしたなかで、大学の未来はどこにあるのか。おそらくその一つの手掛かりは、これまでの大学の歴史、とりわけその中世の成功と近世の失敗にあるように思う。前述のように、中世における大学誕生の基盤には、全ヨーロッパ規模でネットワーク化された諸都市をハブとした人の行き来や物流の活発化があった。多種多様な新時代のノマドが都市に集まり、知識を交換し、新たな発想や学説を生み出していた。都市から都市へと移動するこれらの人々は、新しい知識を伝え、集積する最大のメディアだったのであり、草創期の大学は、そのような人＝メディアを結社的な組織体として組織することに成功した。

他方、近世において、印刷術の発明で知識の生産や流通の方式が決定的に変化した後も、大学はそれまでの伝統的な体制を変革しようとはしなかった。それどころか宗教改革期の宗派対立を超える対話的空間を創出することもなく、人文主義や科学革命への対応も遅れ、ラテン語中心の教育へのこだわりと国民語への蔑視も後の時代まで引きずったため、一八世紀までに大学は、知識生産の拠点としての地位を失っていた。この時代の大学に欠けていたのは、印刷技術を根幹とする新しいメディア状況、そこにおける新たな知識創成への敏感な対応である。このような敏感さを備えていたのは大学人ではなく、ルネッサンスの人文主義者から啓蒙期のエンサイクロペディストまでの、しばしば貴族をパトロンとした民間の知識人や芸術家たちであった。

こうした事例から示唆されるのは、大学はそもそも単独で、新しい知識の形成や流通、継承を可能にする最も基盤的なレベルたり得ないという事実である。大学よりももっと基盤の層には、人としてのメディアという意味も含めた多種多様なメディアによるコミュニケーション＝交通の積層があり、大学は、そのようにして積層する知識形成の実践を集中化させ、再編成し、より安定的に継承可能なものとしていくある種のメタ・メディアである。第一の誕生において、大学は、中世都市という商業空間の「自由」を「大学・学問の自由」として高度に結晶化させることに成功した。しかしその後、大学が近世における変身に失敗したのは、大学はその外側に展開するメディアやコミュニケーション環境と結びつき、それらを媒介するメタレベルの組織になってこそ新しい知識創造の主体たり得るのだということが忘却されてしまったからである。

IV

こうした意味で、今日の大学にとって、最も重要な動きの一つは知識のデジタル化、とりわけグーグル化、ウィキペディア化とも呼ぶべき現象である。コンピュータとインターネットのグローバルな普及を前提に、我々の知識のベースは図書館の書物からネット上のデータベースに移りつつあり、そのようなネット上でグーグルやウィキペディアのような知識生産の新しいシステムが立ち上がりつつある。近年、学生たちはしばしばレポート作成をこれらのネット上のシステムに依存して行っている。未来の大学は、果たしてグーグルやウィキペディアの限界を乗り越える知識生成の場となりうるだろうか。

インターネットに媒介された知識生産と大学との関係に関しては、極端なオプティミズムと極端なペシミズムが併存しているのが現状である。たとえば、教育学の大家マーティン・トロウは『高度情報社会の大学』（玉川大学出版部、2000年）のなかで、情報技術の発展は、「高等教育へのユニバーサル・アクセス（万人のための教育機会の提供）」という考え方に、これまでとは異なった新しいコンセプトを与える結果となった。それは、伝統的な大学適齢人口の学生が誰でも高等教育レベルの学習の機会を得られるという従来の観念から、人々がキャンパスにかぎらず、家庭や職場でもどこでも生涯にわたって教育の機会に与することができるという、ユニバーサル・パーティシペーション（万人の教育参加）というコンセプトへの移行である」との未来像を描く。

しかし、その一方でグーグルやウィキペディアによりほとんどの知識が瞬時にして検索可能になってしまった現実を前に、もう大学はいらないのではないかといった悲観論もないわけではない。だが私は、インターネットが大学の普遍化をもたらすと考えるのはあまりに楽観的に過ぎ、他方でそれが大学人の廃業をもたらすと考えるのもあまりに悲観的に過ぎると思う。グーグルやウィキペディアのようなネット上の知識システムに対し、大学という相対的に古い知識生産の仕組みは、ネットだけでは決してできないいくつかの重要な特徴と可能性を備えている。

第一は、知識の作者性である。大学の講義や図書館に並ぶ本にはほとんどの場合、固有名詞としての語りの主体がいる。私たちは、誰その先生の講義を聴くのであり、尺者がわかっている本を読むのである。教師や作者のほうも、多くの場合、出来不出来はともかく自分にしかできない講義を準備し、自分の書き手としての社会的な評価を賭けて本を出版する。もちろん、発言や記述に間違いがあるかもしれないが、その責任の所在ははっきりしており、少なくとも教師や作者はできるだけ間違いがないように心がけている。

これに対してインターネットでは、知識の作り手が匿名化されがちだ。大学の講義や図書館の本が「誰かの知識」であるのに対し、ネット検索でヒットするのは「みんなの知識」である。もちろん、ネット情報の多くがまったくの匿名というわけではなく、しばしば何らかのハンドルネームを持つ作者によって書かれている。しかし、そのハンドルネームと現実世界の特定の個人が対応するとは限らず、対応すべきだとも考えられていない。ネットは知識の作者性の観念を弱め、知識は「みんな」で作るものだという感覚を強める。

このことは、インターネットのこれまでにない可能性と問題点の両方を示している。今や知識は権威主義から解放され、誰もが自由に参加して書き換えていくことができるものになりつつある。他方、どんな知識も「みんなのもの」となってしまうことで、その向こう側にいる特定の書き手に行きつかない、つまりその知識の責任が誰にあるのかがあいまいになってもいる。教師はいつでも学生から批判されることを覚悟しているし、本の内容が間違っていたら、責任は作者にある。しかし、ネット上で書かれていることが間違っていたとき、その責任は誰にあると言えるのだろうか。

第二のポイントは知識の体系性である。知識はばらばらにある情報やデータの集まりではない。知識とは、様々な概念の内容や事象の記述が相互に結びつき、全体として体系をなしている状態である。当然、そこには重要な知識と重要でない知識、つまり事の軽重がある。中世のヨーロッパで、

人間の知識は樹木に喩えられた。この比喩が示すように、知識には幹と枝葉があり、相互に結びついている。もう150年以上も前に、J・H・ニューマンは、「知識のあらゆる部門は互に関連し合っています。何故なら、知識の内容は『創造主』の御業だからであり、それ自体緊密に統一されているからです。私たちの知識が分類されると申してもよい諸々の『学問』が、相互の関係と内的調和を増大させ、さらに比較や調整を許す、というよりむしろ促すのは、このためです。諸学は相互を完成させ、矯正し、均衡を保ち合うのです。……学問は、一つの統一体の一部と見なす場合と、他の学問の保護もなく、それ自体を切り離して考えてみた場合とでは、まったく異なった様相を呈する」(『大学で何を学ぶか』大修館書店 原著1858年)と論じた。

ところが、ネット上の検索システムは、こうした概念相互の構造的な結びつきなどお構いなしに、利用者を一気に探している事項の情報に連れていく。知識の幹と枝の関係など何もわからなくても、知りたい事項の詳しい情報を得ることができるのである。実に便利だが、利用者は最後まで自分が知の構造の中を進んでいるのか知らないままである。つまり、人々はネット検索で瞬時にして次々に必要な情報を手に入れることで、緩やかに形成される知識を失っているのかもしれないである。

さて、第三のポイントは、知識の歴史性である。今日の知識は、決して一瞬にして生まれたのではない。ある時代に支配的な知の体系は、それ以前の体系の蓄積の上に、それらとの葛藤の末に確立されたものである。コペルニクスが地動説を唱えたとき、彼はそれまで未知のまったく新しい情報を手にしていたのではない。彼のところには、多数の既知の情報が本のかたちで集積されていた。コペルニクスは、それらをそれまでの時代とは異なる仕方で整合的に解釈する新たな枠組みを作り上げたのである。

したがって、知識とは決して不変の固定物でも、次々に加えられる情報の総和なのでもない。それは何よりも世界を理解する体系的な枠組みであり、私たち自身の日々の無数の認識や思考の積み重ねのなかで作り変えられている。知識を得るとは、こうした枠組みの創造プロセスに参加することに他ならない。それはつまり、過去の知識との対話の実践である。大学は、そうした過去の知と私たちが対話する媒介装置としての役割を果たしてきた。大学において私たちは、単に新しい情報の獲得しているのではなく、積み重ねられてきた過去の声と、ある空間的な広がりをもって対話しているのである。

以上の三つは、インターネットが簡単には大学に取って代わることのできない構造的なポイントである。ネット時代の大学は、単純な学位授与機関や知識伝達機関の役割にとどまるのではないなら、知識の作者性、体系性、歴史性を育んでいく仕組みを全力で発達させていかなければならない。前述のように、大学は現在、その第二世代が末期的な症状を示しながらも爆発的に増殖している状況にある。すでに日本では、このような爆発がもはや限界に達しつつあることも明らかだ。爆発と危機の時代を乗り越えて、未来の大学がなお知の創造的な対話の場であるためには、インターネットを中核とする新しいメディア環境との連携と自らの本分の再発見を本格的に推し進めていく必要がある。知識の作者性と体系性、歴史性は、その際の一つの道標になるのではないかとも思う。

それでも、大学が必要だ——爆発と危機の中で

注記 本稿は、拙稿「爆発の時代に大学の再定義は可能か」（『中央公論』2010年2月号所収）に大幅に加筆修正を加えたものである。